

舞踊運動の美的判断に関する一研究

— 動きの伝達に関して —

上 等 久 子

1. 研究目的

小学校、中学校、高等学校の体育の指導要領⁽¹⁾の中で女子における舞踊の占める役割は大きく更に幼児においてはなおいっそう、心身の発達上からも重要な役割を果している⁽²⁾⁽³⁾。そして、その研究も数多く行なわれて来ている。しかし、今日に至るまで舞踊そのものの本質は何であるか、また他の体操、スポーツなどの関連からその特性は何か、など、まだよく明らかにされていないまま行なわれ、教師にとっては頭の痛い内容であり、生徒にとっては大好きな活動であるべきものが、その一つには成り得ていないのが実状である。

以上のような諸問題（舞踊において美的に身体表現を行なう事が、その特性の一つと考えられるが）を少しでも解決する為に舞踊の本質、特性の一つである舞踊の美的判断の内容を明らかにして行きたいと考える。

そして、美的表現の研究において、松本千代栄、川口千代は、「美を主（主観）と客（対象）の相互作用の中に成立する働き⁽⁴⁾」として捉えているが、舞踊芸術において、主は鑑賞者、客は舞踊とした時、舞踊を演じている踊り手の持つ美的な感覚が鑑賞者に何らかの形で伝わった時、鑑賞者にある種の感動を呼び起こすものと考えられる。しかしこれらの美的判断の内容はまだ十分に明らかにされていない。

前回の著者の研究⁽⁶⁾の中で、舞踊運動において相対する感情、喜びと悲しみの表現内容で踊り手が踊って見せた時、その二つの舞踊運動を、鑑賞者が異って受けとったが、今回は更に踊り手の経験の差による舞踊の持つ美しさが鑑賞者に伝わるかどうか、またその要因として動きの感じと動き方に差があるかどうかを美的判断の

内容の一部を明らかにする為に、踊り手の熟練者と未熟練者とで比較し、それを鑑賞者に見せ言語による反応で検討した。

舞踊の熟練者と未熟練者が同一動作の舞踊運動を行なって見せた時、鑑賞者にどの様に異なって受けとられるかを明らかにする目的で行なった。

2. 研究方法

2-1 動き

動きは2種類で図1の作品中の感じの有る1フレーズ⁽⁷⁾を選び Mov. ④, Mov. ⑤とした。

1フレーズの動き	Mov. ④	Mov. ⑤
舞踊作品の題	春のひざしがまぶしくて	記憶のはとり

図1

Table 1 「美しい」、「美しくない」、
「美しい」—「美しくない」の割合

%	1 Mov. A (T)	2 Mov. B (T)	3 Mov. B' (U)	4 Mov. A' (U)	合計
「美しい」	70	29	0	1	100
「美しくない」	0	7	32	61	100
「美しい」 —「美しくない」	70	22	-32	-60	200 0

2-2 対象

- ・踊り手。舞踊熟練者（T）
経験年数7年，（H.U）女子
舞台出演回数5回以上／年
- ・舞踊未熟練者（U）
経験年数3年，（Y.I）女子
舞台出演回数1回以下／年
- ・鑑賞者。山梨県立女子短期大学生100名

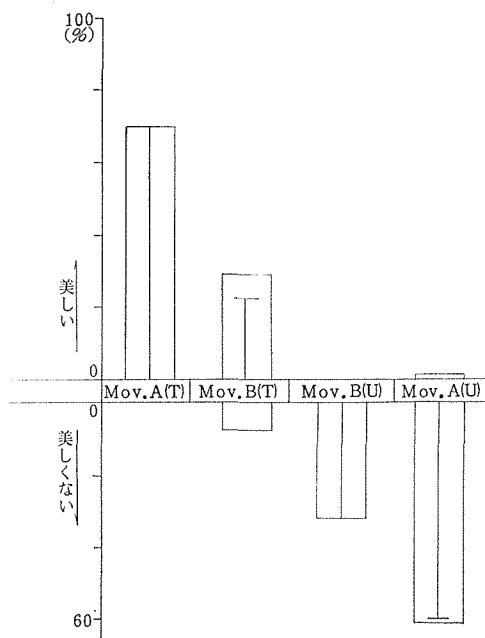


Fig. 1 「美しい」「美しくない」と答えた割合とその差

2—3 実施期日

- ・ 16mmfilm 撮影……昭和52年 4 月30日
- ・ 16mmfilm 鑑賞……昭和52年 5 月12日

2—4 美の比較の観点（鑑賞者の言語の反応による。）

- ① 「美しい」「美しくない」と感じた動きの選択（各1つ）
- ② それぞれの動きの感じと動き方について自由記述
- ③ 下記の観点による対語の選択（尺度法による）
 - a { 動きの感じ………expression
(フイーリンク)
動き方………technique
 - b Creative, Design, Dynamics, Time (Rhythm)
(松本千代栄の分類による)

舞踊熟練者と未熟練者に Mov. ㉔, Mov. ㉕を行なわせ, 16mmfilm 撮影をした。これを100名の学生に見せ, 言語による反応を見(Fig. 2 参照), 下記の観点から検討を行なった。

- ① 4つの動きの美的判断「美しい」と「美しくない」に答えた割合

- ② 言語による反応—5段階尺度 (Mode)
- ③ 言語による反応—点数値5段階尺度値に重みを付加)
- ④ 言語による反応—3尺度による有意差
- ⑤ Creative, Design, Dynamics, Time (Rhythm)
- ⑥ 美的判断とその要因（動きの感じと動き方との関連）

3. 結果と考察

3—1 4つの動きの美的判断「美しい」と「美しくない」に答えた割合 (Table 1, Fig 1)

- ① Table 1 に示すように4つの動きについて「美しい」と「美しくない」の間に有意な差があった。⁽⁹⁾ ($P < 0.05$)

Mov. A と Mov. B は「美しい」, Mov. A' と Mov. B' は「美しくない」という結果を得た。(Table 1)

- ② 「美しい」と答えた動きは Mov. Aが70%で一番高い値を示し, 「美しくない」と答えた動きは Mov. A' が 61%で一番高い値を示した。(Fig. 1)

- ③ 「美しい」と答えた者は自由記述でその内容を

- ・ 何かうれしい事があって心がおどっているよう。のびのびはれした動き。
- ・ 動きが体の中から出てきている。と肯定的に述べている事が多く, 「美しくない」と答えた者はその内容を,
- ・ Mov. A' は, Mov. A と似た動きだが, 全然元気がなく生々とした感じが無い。ピンツとしていない。
- ・ 動きにはりがない。バランスが悪い。と否定的に述べている事が多かった。

3—2 言語による反応—5段階尺度 (Mode)

Table 2 と Fig 2 はイロハ (二) ホへの左側に Mov. ㉔ の動きの感じを, 右側に Mov. ㉕ の動きの感じを示し, ス～ネまでは, 動き方, (Design, Dynamics, Rhythm) の良いものを左側に, 悪いものを右側に示した。そしてそれぞれの項目に5段階尺度を設け, Mode をその値とした。Table 2 はその値, Fig 2 はその図である。なお, Fig. 2, 3, 4 と Table. 2, 3, 4 に示す言語反応の内容は前回の研究をふまえ

石黒節子⁽¹⁸⁾の研究を参考に、松本⁽⁸⁾の分類をとり入れ、更に検討を加えて著者が作製したものである。これらを見ると、

- ① Mov.A は動きの感じと動き方の両方に高い値を示しており、特に動きの感じが顕著である。
- ② Mov.A' は動きの感じも動き方も低い値を示しており、特に動き方において顕著である。
- ③ Mov.B は動き方<ス手が伸びている、ル足が伸びている、カ動きの切れが良い、レめりはりが明確>が高い値を示している。
- ④ Mov.B' は動きの感じも動き方も2~4の間の値を示している。

3-3 言語による反応一

点数値(5段階尺度値に重みを付加)

Table. 3 は Fig. 2 の3を中心0とし、左から順に〔2, 1, 0-1, -2〕と点数を付加し得た値で、Fig. 3はその図である。

- ① Mov.A は Fig. 2 と同様に動きの感じと動き方の両方に高い値を示している。
- ② Mov.A' は動きの感じと動き方の両方に低い値を示している。
- ③ Mov.B は動き方がよく、<ヲ極限まで体を使っている、ワバランスが良い、カ動きの切れが良い、ヨ起伏がある、レめりはりが明確、ネ強い感じ>が Mov.A より高い値を示している。
- ④ Mov.B' は動きの感じが低い値(表現内容の動きの感じが(-))を示している。これは、表現内容の項目と一致するが、美的判断が3番目である。その原因は<ニ表情が死んでいる>に低い傾向がでている為であり、動きの感じの<イ暗い、ロ悲しい、ホさわやかでない表情>は、美的判断が得られにくい内容である為である。また、動き方が Mov.A, Mov.B とくらべてそれほどよくない事があげられる。しかし Mov.A' より美的判断が良かったのは動きの感じも動き方も Mov.A' より高い値をとっている為である。

3-4 言語による反応一3尺度による有意差

Table. 4 は 50%以上の値を取ったものを記し、(+)は+の有意な差を(-)は-の有意な差の有ったものを示した。Fig. 4は有意差の有ったものを図示した。(P<0.05)

- ① 熟練者の Mov.A と Mov.B は (+) の有意差が、未熟練者の Mov.B' と Mov.A' は (-) の有意差があった。

Mov.A は (+) が14個、Mov.B は (+) が10個、Mov.B' は動きの感じが (-) で表現内容と一致するので $4 - 1 = 3$ で (+) が3個 _{(+), (-), (+)} Mov.A' は (-) が7個であるので、有意差の有った数では、順位が Mov.A, Mov.B, Mov.B', Mov.A' となる。これは 3-1 (Table. 1, Fig. 1) の美的判断の結果と一致する。

- ② Mov.A は<イ明るい、ロうれしい、ハ春風のようなニ表情が生々している、ホさわやかな表情、ヘうちひしがれていない表情、ト目線が明確、チ外向的な、リ伸びやかな>の動きの感じに、有意差が有り、動き方では<ス手が伸びている、ル足が伸びている>の Design に<タなめらかな動き、ソリズムが体から出ている、ツリズムカルな>のリズムカルな、Rhythm に有意差があった。

- ③ Mov.B は動きの感じに有意差がなく、傾向はない。動き方は<チ外向的な、リ伸びやかなス手が伸びている、ル足が伸びている>の Design に有意差が、<ヲ極限まで体を使っている>、<ワバランスが良い>に有意差が<カ動きの切れが良い、ヨ起伏がある、レめりはりが明確、ネ強い感じ>の Dynamics な Rhythm に有意差があった。

- ④ Mov.B' は <イ暗い、ロ悲しい、ハ記憶をたどる様な、ホさわやかでない表情>の動きの感じに有意な (-) の差があった。これは表現内容と一致する。動き方は<ツリズムカルでない>に (-) の有意差があった。

- ⑤ Mov.A' は <ヲ極限まで体を使っていない、ワバランスが悪い、カ動きの切れが悪い、ヨ起伏がない、レめりはりが不明確、ソリズムが体から出していない、ネ弱い感じ>の動き方で Rhythm が (-) の有意差があった。

以上 Mov.A は動きの感じと動き方(Rhythm)が良く、3-1の美的判断が一番高い値を示している要因である。Mov.B は Mov.A にくらべて動き方が良く、特に Dynamic な Rhythm がすぐれている。しかし、動きの感じがそれほどでもなくこの事が美的判断を2番

目にした要因である Mov.B' は動きの感じが表現内容と一致しているものが多く、動き方も Mov.A' より良いが Mov.A や Mov.B より悪い。この事が美的判断を3番目にした要因である。更に、動きの感じは単に暗ければ、悲しければ、美的判断が得られるものでなく、より Creative になされる事が大切である。日常的な暗さ、悲しさを体験し、それを基盤にしながら更に日常からの離脱がなされ、自分なりの見方、感じ方で生々と表現された舞踊は、見ている人に伝わり美的判断が得られるものと考ええる。Mov.A' は動きの感じと動き方が悪く、特に動き方が顕著である。この事が、美的判断を4番目にした要因で有る。

3—5 Creative, Design, Dynamics, Time (Rhythm)

① Creative

Mov.A は<ハ春風のような、ニ表情が生々している、ト目線が明確>に高い値を示してい

る。(Table 2, Table 3, Tlable 4)

Mov.B は<ニ表情が生々している、ト目線が明確>に傾向が出ている。(Table 3, Table 4)

Mov.B' は<ハ記憶をたどる様な>に有意差がみられ (Table 4), 傾向がみられた。

(Table 3) また<ニ表情が死んでいる>にも傾向がみられた。(Table 3)

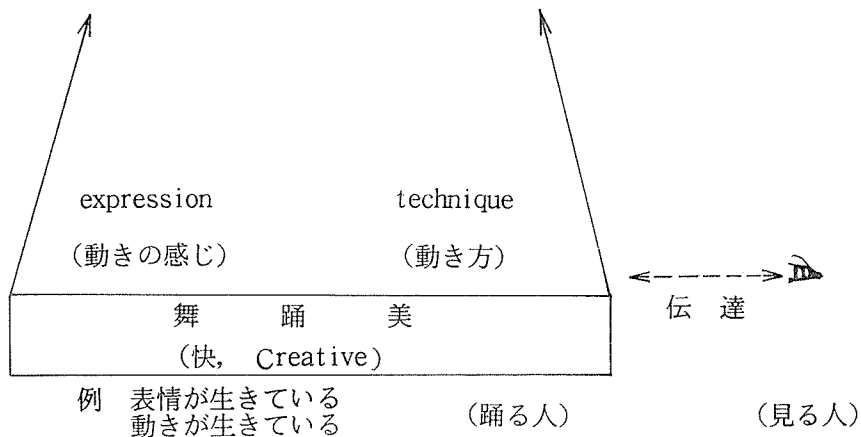
この事より、記憶をたどる様な創造的なものが少しあったとしても、見ていて快を感じる美的判断を得るものが必要で、動きの感じが明るくても、暗くても、表情は生きていなければならない。それは見ている人に美的判断を得る為には、どの動きにおいても舞踊に必要な共通の要因が動きの感じと動き方の base に有る事を意味する。(それを仮に舞踊美とする。)

(図Ⅱ 参照)

Mov.A' は<ニ表情が死んでいる、ホさわやかでない表情、ト目線が不明確>に高い値を示し (Table 2), その傾向が出ている。

(Table 3, Table 4)

図Ⅱ 舞 踊 運 動 の 一 構 造



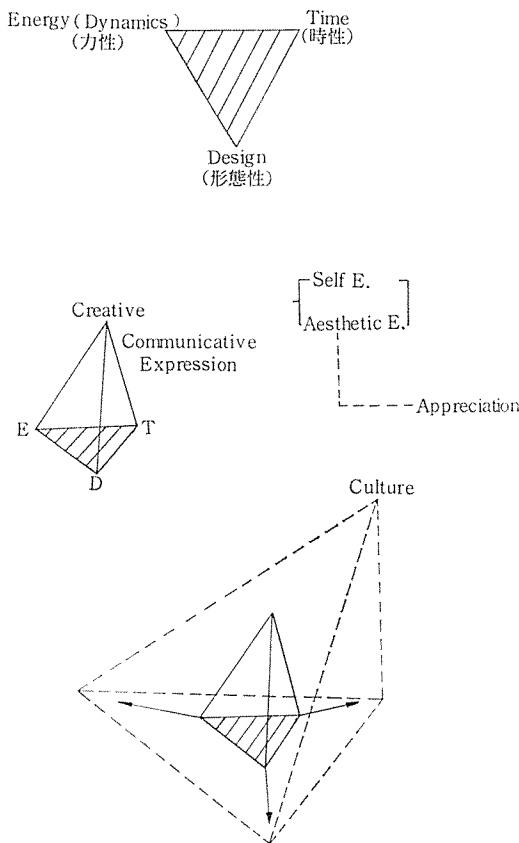
松本千代栄は、運動と美的表現の中で、運動表現の成因について、⁽⁸⁾ 1.運動時性 (Time) 2.運動力性 (Energy or Dynamics) 3.運動形態性 (Design) の3点をあげ、体操競技にみられる律動運動の美を説明している。更に運動を創るもの——自己表出としてとらえる時、第4の支点として創造的な働き、Creative をあげ、「運動を合理的に訓練するものとしてとらえる時、底面積の拡大であり、運動を自から

創るものとして心とともにとらえる時、三角錐の拡大=立体的な変化、転開、発展としてみられる。」と述べ「律動体操と舞踊がこの図形上に区別されるのは、舞踊が第4の支点をどのようにとらえるかにおいてである。」と舞踊における Creative の重要性を述べ、「舞踊では、感情の表出として、動きはその当初から、伝達性を予想してとらえられる。舞踊の動きは、いわば、創造的・伝達の表現として発見されるも

のというべきであろう。」と綴っている。

(図Ⅲ 参照)

図Ⅲ 運動表現の成因 松本千代栄



舞踊芸術においてその作品を評価する場合、最終的にはそこで踊られている踊り手の個性、性格、生きている何ものかがみえてこなければならない。その為には、人それぞれに持って生まれた性格があるが、その性格を生かし、その人にしかない持ち味を引き出す事が大切である。またその事はよりよい作品が生まれる可能性を生む。そして更にその為には、内面を外に表わす技術、感性を引き出す、指導法が必要になって来る。そして、踊る人は、表現技術として、expression (動きの感じ) と technique (動き方) の両面が技能として獲得される事が必要で、(Creative, Design, Dynamics, Time Rhythm) の要素がより豊かに深く、心と体、感性と運動感覚で獲得される事が必要である。そして特に Creative は、人間にとって重要で、Alma M, Hawkins は、「創造する事は人間の

衝動であり、根本に人間理解がある。人々が創造的美的経験を求める事が人を1人格として豊かにせしめる。」と述べている。そして Creative に行なう活動は自発的で主体的である為、その人の生きた何ものかが発揮されランガーの言う(主観的実在の客観的表出が芸術作品である。)芸術作品となり得る。

② Design<伸びに関して>

Mov.A は伸びに関しては4つの動きの中で一番高い値を示している。

・ Fig. 2 <チ外向的な、リ伸びやかな、ヌ手が伸びている、ル足が伸びている>

Fig. 3 <チ外向的な、リ伸びやかな、ヌ手が伸びている、ル足が伸びている>

Fig. 4 <チ外向的な、リ伸びやかな、ヌ手が伸びている、ル足が伸びている>

Mov.B は、伸びに関しては高い値をとっている。

Fig. 2 <ヌ手が伸びている、ル足が伸びている>

Fig. 3 <リ伸びやかな、ヌ手が伸びている、ル足が伸びている>

Fig. 4 <チ外向的な、リ伸びやかな、ヌ手が伸びている、ル足が伸びている>

Mov.B' は伸びに関してはあまり傾向がみられない。(Fig. 2, Fig. 3, Fig. 4 参照)

Mov.A' は伸びに関しては低い値を示しているものがある。

Fig. 2 <ヌ手が伸びていない、ル足が伸びていない>

以上 Design の伸びに関しては、Mov.A が4つの動きの中で一番よく、外向的で、伸びやかで、手も足も、よく伸びている動きである。Mov.B はそれについて良く、Mov.B' はどちらともいえない動きで、Mov.A' は伸びていない動であると言える。

Design の中で、伸びに関しては、体の線が見る人に明確に見え、伸びる過程の中で有る種の感じを醸し出し、内的な感情を外に形として表わす。形態的な美しさと同事に、内面の世界を形として写し出すという点で、重要な働きを持つ。

③ Dynamics

Mov.A は Dynamics に関しては傾向は出

ていない。(Fig. 2 Fig. 3 Fig. 4 参照)

Mov.B は Dynamics に関しては4つの動きの中で一番高い値をとっている。

Fig. 2 <カ動きの切れが良い, レめりはりが明確>

Fig. 3 <ヲ極限まで体を使っている, カ動きの切れが良い, ヨ起伏がある, レめりはりが明確, ネ強い感じ>

Fig. 4 <ヲ極限まで体を使っている, カ動きの切れが良い, ヨ起伏がある, レめりはりが明確, ネ強い感じ>

Mov.B' は Dynamics に関してはあまり傾向はでない。(Fig. 2, Fig. 3, Fig. 4 参照)

Mov.A' は Dynamics に関しては4つの動きの中で一番低い値を示している。

Fig. 2 <ヲ極限まで体を使っていない, カ動きの切れが悪い, ヨ起伏がない, レめりはりが不明確>

Fig. 3 <ヲ極限まで体を使っていない, カ動きの切れが悪い, ヨ起伏がない, レめりはりが不明確, ネ弱い感じ>

Fig. 4 <ヲ極限まで体を使っていない, カ動きの切れが悪い, ヨ起伏がない, レめりはりが不明確, ネ弱い感じ>

以上 Dynamics に関しては Mov.B が4つの動きの中で一番高い値を示し, Dynamic な動きである。Mov.A, Mov.B' はそれほど Dynamic な動きではなく, Mov.A' は4つの動きの中で一番 Dynamic な動きでなく, この事が美的判断を得られなかった要因の一つとしてあげられる。

舞踊において Dynamics は 重要で, 松本千代栄⁽⁸⁾はランガー (Langer, S.K.) の言葉を借りて, 「舞踊は動的な力の出現 (Apparition) 即ち『ダイナミック・イメージ (Dynamics image)』である。」とし「舞踊作品は, ダイナミック・イメージとして一つの観念 idea を出現させたものであり, この観念の出現は人間感情の本質を表現し, 内的生命 (inner life) が客観的なシンボル (objective symbol) として示されたものである。」としているように, 個人の内的生命, すなわち彼自身の生涯の内面史この世界に生きる態度, その感じ方につながる内面的な本質を芸術作品に客観的に表出する上

で Dynamics の働きは重要である。

④ Time (Rhythm)

特に Rhythm について考察する。

(1) リズミカルなリズム (流れのある動き)

(2) Dynamics の有るリズム

(1) リズミカルなリズム (流れのある動き)

Mov.A は Fig. 2 ソリズムが体から出ている
ツリズムカルな

Fig. 3 タなめらかな動き

ソリズムが体から出ている
ツリズムカルな

に高い値を示している。

Fig. 4 タなめらかな動き

ソリズムが体から出ている
ツリズムカルな

に有意差が有った。(P<0.05)

Mov.B は Fig. 2 ソリズムが体から出ている
ツリズムカルな

Fig. 3 ソリズムが体から出ている

に傾向が出ている。Fig. 4 には有意差はなかった。

Mov.B' は Fig. 2 ツリズムカルでない

Fig. 3 タぎこちない動き

ツリズムカルでない

に (一) の傾向が出ている。

Fig. 4 ツリズムカルでない

に有意差が有った。(P<0.05)

Mov.A' は Fig. 2 タぎこちない動き

ソリズムが体から出ていない

ツリズムカルでない

に低い値を示している。

Fig. 3 タぎこちない動き

ソリズムが体から出ていない

ツリズムカルでない

に (一) の傾向が出ている。

Fig. 4 ソリズムが体から出ていない

に (一) の有意差があつた (P<0.05)

(2) Dynamics のある Rhythm

Mov.A は Fig. 2 に傾向はなかった。(Fig. 3 カ動きの切れが良いに少し傾向が出ている) Fig. 4 に有意差はなかった。

Mov.B は Fig. 2 カ動きの切れが良い
レめりはりが明確

に高い値を示している。

☐起伏がある
ネ強い感じ

に傾向が出ている。

Fig. 3 カ動きの切れが良い

☐起伏がある
レめりはりが明確
ネ強い感じ

に高い値を示している。

Fig. 4 カ動きの切れが良い

☐起伏がある
レめりはりが明確
ネ強い感じ

に有意差があった ($P < 0.05$)

Mov. B'はFig. 2 カ動きの切れが良い

☐起伏がある

Fig. 3 カ動きの切れが良い

☐起伏がある

に傾向が出ている。Fig. 4に有意差はなかった。

Mov. A'はFig. 2 カ動きの切れが悪い

☐起伏がない
レめりはりが不明確
ネ弱い感じ

に低い値を示している。

Fig. 3 カ動きの切れが悪い

☐起伏がない
レめりはりが不明確
ネ弱い感じ

に低い値を示している。

Fig. 4 カ動きの切れが悪い

☐起伏がない
レめりはりが不明確
ネ弱い感じ

に(一)の有意差が有った ($P < 0.05$)

以上の事より

Mov. A は リズミカルで流れのある動きである。

Mov. B は Dynamics の有るリズムの動きである。

Mov. B'は少しDynamics の有るリズムの動きではあるが、少しぎこちなく、リズミカルでない動きである。

Mov. A'はリズムが体から出ていない、Dynamics の無い動きである。

著書「モダンダンスのシステム」⁽¹⁰⁾の力と時間の意識の中で、二つの性質の動き (a) と (b) をあげ、力特性を説明しているが Mov. A はその (b) fine touch movement (軽く浮きがある感じの動き) に、Mov. B はその (a) firm movement (強くひきしまった感じのある動き) に分類される。このように Dynamics の性質の違いは感じの違いにも表われ力特性は、時間特質と融合してリズムをつくる。⁽¹⁰⁾(「拍子だけではリズムはつくられない。リズムをつくるのは、持続時間の変化とアクセントをつけることとの融合である。換言すれば、時間と力の融合である。」とV. プレストン〔松本千代栄訳〕は述べている。)

「またリズムには2種類ある—拍節的リズム (metric) と非拍節的リズム (free rhythm) とか呼吸リズム (breath rhythm) とも言われる。」⁽¹⁰⁾と述べられているように Mov. A は拍節的リズムで、ステップを踏んでおり、Mov. B は非拍節的リズムで呼吸リズムである。

そして Mov. A は even なリズムで Mov. B は uneven なリズムであり、⁽¹³⁾呼吸のリズムも Mov. A はリズムカルで Mov. B はリズムカルでない平常時とくらべ大きなまとまりのある呼吸と考えられる。また、「舞踊運動における表現と呼吸に関する研究」⁽⁶⁾で明るい喜びの踊りはリズムカルで、呼吸もリズムカルなのにくらべ暗い悲しみの踊りはリズムカルでなく、リズムカルでない長い持続した呼吸であったが、前者は Mov. A 後者は Mov. B' がそれに当たるものと予測される。しかし、更に後者が熟練する為には長い呼吸でも、まとまりのある呼吸となる事が必要であろう。(日常的な感情のはいつた、呼吸から舞踊としてのリズムのある呼吸への移行へ更にその為の練習法としては、「ダンスの創作過程」⁽¹⁴⁾の第4章音楽の構造と動きが一つの方法としてあげられ、基礎的なリズムの観点から動きを学ぶのに有効で、時間の観念を知る (keep time) 能力をのばすのによい。もう一つの方法としては、創造的な課題や条件を与えて、内面からリズムが生まれてくる方法が良い。この二つの方法は他の方向を助すけ、よりよいリズムを持つ舞踊運動へと広がりを作成する。

S.K. ランガーは、音楽に内在する意義について、「人間感情の諸形式は言語の諸形式よりもはるかに音楽の諸形式に適合している為に、音楽は言語の及ばない詳細さと真実さを持って感情の本質を表わし示すことができる。音楽が生と情感の事実を、表現する一つの意味体系として、このような明晰な表現性を持つ……云々」と音楽について述べているが、舞踊についても同様の事が言へ、生命という統一体としてのリズムがそれを可能にする。

3—6 美的判断とその要因（動きの感じと動き方）との関連

① 美的判断を1番目に得たのは Mov. Aである。その要因は動きの感じと動き方の両方が良かった事にある。特に動きの感じが良く、明るく、春風の様で、表情が生々して、さわやかな表情である。動き方では、伸びがあり、リズムミカルで、リズムが体から出ているのが、この動きの特徴となっている。

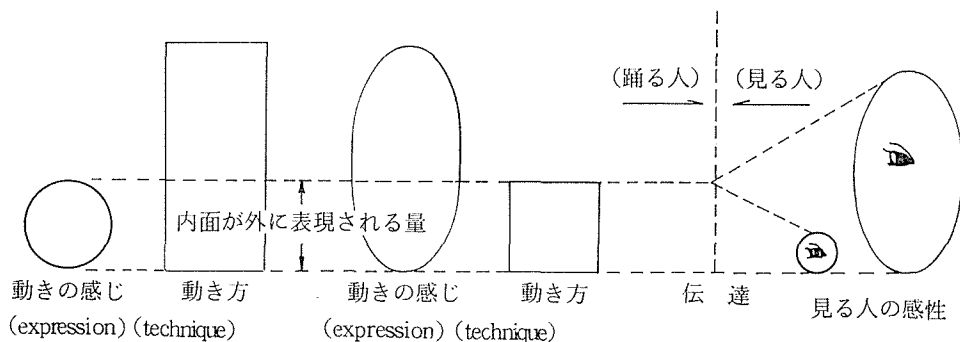
② 美的判断を2番目に得たのは Mov. Bである。その要因は動きの感じには傾向が見られなかったが、動き方が良い事にある。動き方は伸びがあり、バランスが良く、極限まで体を使

っている。また動きの切れがよく、起伏のあるめりはりが明確な「Dynamics」のあるリズムが特徴である。

③ 美的判断が3番目に得られたのは Mov. B' である。その要因は動きの感じも動き方も良くも悪くもなかった事である。動きの感じにおいて暗い、悲しい、記憶をたどる様なに有意差があつたにもかかわらず、リズムミカルでないに有意差が有った事が、この動きを特徴づけている。

④ 美的判断が4番目に得られたのは Mov. A' である。その要因は動きの感じに表情が死んでいる、さわやかでない表情の悪い傾向があり、動き方も悪く、極限まで体を使っていないバランスが悪く、動きの切れが悪く起伏がなくめりはりが不明確で、弱い感じの「Dynamics」のないリズムで、リズムが体から出していない動きとなっている為である。

以上の結果と考察から舞踊の美的判断の要因として動きの感じと動き方があげられる。これは expression と technique の一部であり、表現技術を考える上で重要であり、図Ⅳの図で示すように expression と technique は互い



図Ⅳ

に作用し合い、両面にすぐれている事が美的判断を高め、踊り手の内面を外に表出し、見る人に客観的に伝え、より感動を深いものにする。

また美の一構造として、図Ⅴに示す様に「美しい」、「美しくない」と感じる美的判断が有り舞踊に共通なまた独自の美（今回明かになった「表情が生きている」、更に「動きが生きている」事が、舞踊の独自の美と考えられる

が）などの舞踊美があり、expression（動きの感じ）と technique（動き方）がある事がわかった。（図Ⅴ）

更に美的判断を表わすものは、美しい（美しくない）だけでなく、好き（嫌い）、心にびつたりくる、おもしろい、などもあげられる。これらについては、次回の研究に生かし、研究を進めたい。特に好き（嫌い）については、小野

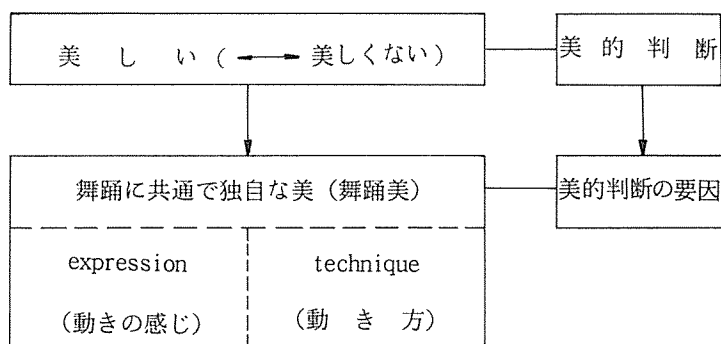


図 V

田恭子の「舞踊作品の鑑賞に関する研究」⁽¹⁶⁾で鑑賞者が作品の良さを決定する要因に上げている事は興味深い。

渡辺護は芸術学⁽¹⁷⁾の中で「もとより芸術の現象の『事実』を見きわめようとする事は容易ではない。ここには自然科学の対象のように、絶対的な客観性を持つ真理は見出し得ないであろう……云々。しかし、すべての学が絶対的客観性を持たなければならぬと考える必要はない。芸術における『事実』の把握は正か不正かによって決まるというより、むしろいわば浅いか深いかによって決まるのである。その点で芸術学を行なうものはある程度芸術家の目を持たねばならぬし、芸術学そのものもある程度芸術の性格を帯びるであろう。」と芸術を研究対象とする難しさを述べているが、あえて新しい、また興味深い分野に足をふみ入れて見た。その為、力が及ばず、不備な点が多く、とりくむ問題が大きすぎたと思っているが、不備な点は更に研究を積み重ね、より良いものにして行きたい。そして「舞踊はすばらしい」と心から思い、踊る実感を吐く人々が少しでも増える指導ができたらと思う。

4. 結 論

踊り手の経験の差による舞踊の持つ美しさが鑑賞者に伝わり、その美的判断の要因としての動きの感じと動き方に差があった。そして美的判断を最高に得ている舞踊は両方に優れており美的判断を最低でしか得られなかった舞踊は両

方に劣っていた。

以上の事から、動きの感じと動き方の両方にすぐれている事が、舞踊の美的判断を得る為に重要な要因である事が明らかとなった。

謝 辞

本研究は、石黒国雄先生と石黒節子先生に指導を頂き、山梨県立女子短期大学の皆様方、並びに学生の方々に協力を頂きました。ここに深く感謝の意を捧げます。

参 考 文 献

- (1) 松田岩男他編：ダンス，現代学校体育大事典，大修館書店 523～556 (1973)
- (2) 高木俊一郎：子どもの心とからだ，創元医学新書—A55— (1974)
- (3) 水谷光編：音楽リズムの指導，建帛社 (1977)
- (4) 松本千代栄，川口千代：動きの感情価に関する研究，東京教育大学体育学部紀要 11 47～64 (1972)
- (5) シェルドン・チェニー編，小倉重夫訳編：イサドラ・ダンカン「芸術と回想」富山房 (1977)
- (6) 上等久子：舞踊運動における表現と呼吸に関する一研究，女子体育 18, 7, 50～57 (1976)
- (7) 徳家雅子：舞踊におけるフレージングと伝達についての一考察，東京教育大学体育部修士論文 (昭和46年度) (1971)
- (8) 岸野雄三他編，松本千代栄：運動と表現 (Ⅷ) 序説運動学，大修館 (1968)
- (9) 上等久子：舞踊運動における表現と呼吸に関する一研究，昭和50年度東京教育大学体育学部修士論文 (1975)

- (10) V・プレストン著, 松本千代栄訳: モダンダンスのシステム, 大修館 3,21 (1976)
- (11) Alma M. Hawkins: Creating through dance P-RENTICE-HALL 6~7 (1964)
- (12) Langer S.K.: Problem of Art 7~9 (1957)
- (13) 上等久子: 舞踊運動におけるリズムの把握の一考察—リズムと呼吸との関連—女子体育 16,4 30~34 (1974)
- (14) A. ロックハート, E. ピース著, 松本千代栄, 石黒節子訳: ダンスの創作過程 大修館 53~72 (1974)
- (15) S. K. ランガー著, 矢野萬里他訳: シンボルの哲学, 岩波書店 (1974)
- (16) 小野田恭子: 舞踊作品の鑑賞に関する研究, 作品の良さを決定する要因と鑑賞者の性格特性について, 女子体育 16,4 (20~201974)
- (17) 渡辺護: 芸術学, 東京大学出版 (1975)
- (18) 石黒節子「運動美の伝達に関する研究」日本体育学会 (1975)

Table. 2 言語による反応 (5段階尺度)

			Mov A	Mov B	Mov B'	
フィ ー リ ン グ (クリエ イ テ ィ ブ	イ	明	5	3	2	暗
	ロ	う	5	3	2	悲
	ハ	れ	5	3	2	し
	(ニ)	春風の様	5	3	2	記憶をたどる様
	ホ	な表情が生々している	5	3	3	表情が死んでいる
	ヘ	さわやかな表情	5	3	2	さわやかでない表情
	(ト)	うちひしかれていない表情	5	3	3	うちひしがれた表情
	チ	視線が明確	5	3	3	視線が不明確
	リ	外向的	5	4	2	内向的
	ス	伸びやかな	5	4	2	圧迫された
動 き 方	ル	手が伸びている	5	5	4	手が伸びていない
	ヲ	足が伸びている	5	5	3	足が伸びていない
	ワ	極限まで体を使っている	4	4	2	極限まで体を使っていない
	カ	バランスが良い	4	4	2	バランスが悪い
デ リ ン グ (ダイ ナ ミ ク ス)	ヨ	動きの切れが良い	3	5	4	動きの切れが悪い
	タ	起伏がある	3	4	4	起伏がない
	レ	なめらかな動き	4	3	3	ぎこちない動き
	メ	めりはりが明確	3	5	3	めりはりが不明確
イ ン プ ツ ツ	ソ	リズムが体から出ている	5	4	3	リズムが体から出していない
	ツ	リズムミカル	5	4	2	リズムミカルでない
ネ	強	い感	3	4	3	弱い感

Fig. 2 言語による反応 (5段階尺度)

Fig 2, Fig 3に使用の記号

○ HUのMov A △ HUのMov B
△ YIのMov A △ YIのMov B

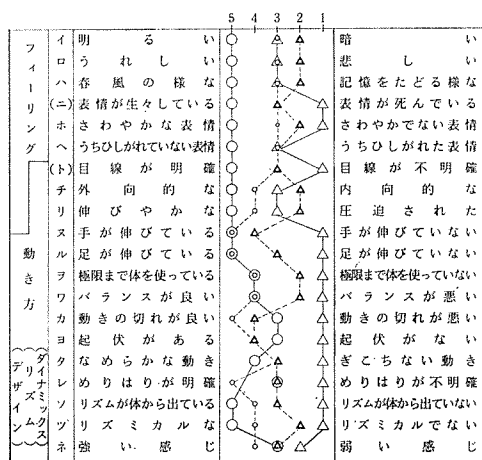


Table.3 言語による反応点数値
(5段階尺度に重みを付加)

			Max A	Max B	Max C	Max D			
フィ イー リン グ	イ	明 る い	153	5	-101	36	暗	し	い
	ロ	う れ し い	146	3	-84	40	悲	し	い
	ハ	春 風 の 様 な	123	-13	-69	24	記 憶 を た ど る 様 な		
	(ニ)	表情が生々している	125	63	-53	-58	表情が死んでいる		
	ホ	さわやかな表情	130	-10	-87	-39	さわやかでない表情		
	ヘ	うちひしがれていない表情	140	-33	50	-40	うちひしがれた表情		
	(ト)	目線が明確	99	59	-12	-66	目線が不明確		
	チ	外向的な	123	57	-53	19	内向的な		
	リ	伸びやかな	152	80	-58	26	圧迫された		
	ス	手が伸びている	128	127	62	-40	手が伸びていない		
動き 方	ル	足が伸びている	125	108	-4	-67	足が伸びていない		
	ヲ	極限まで体を使っている	21	89	-12	-123	極限まで体を使っていない		
	ワ	バランスが良い	78	89	-37	-88	バランスが悪い		
	カ	動きの切れが良い	45	121	53	-97	動きの切れが悪い		
	コ	起伏がある	-4	102	48	-95	起伏がない		
	タ	なめらかな動き	109	39	-46	-67	ぎこちない動き		
	レ	めりはりが明確	12	123	23	-104	めりはりが不明確		
	ソ	リズムが体から出ている	92	78	-26	-55	リズムが体から出していない		
	ツ	リズムミカルな	116	47	-69	-40	リズムミカルでない		
	ネ	強い感じ	-7	102	24	-95	弱い感じ		

Fig.3 言語による反応点数値
(5段階尺度に重みを付加)

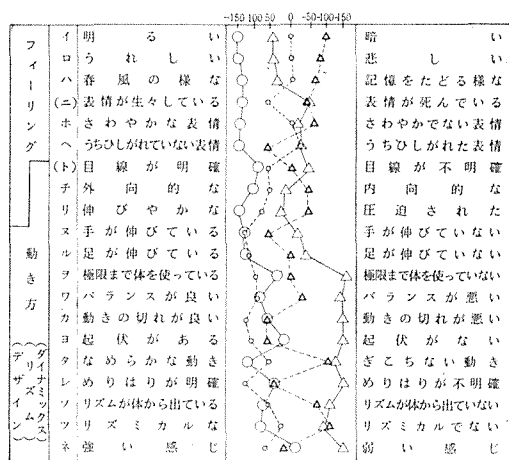
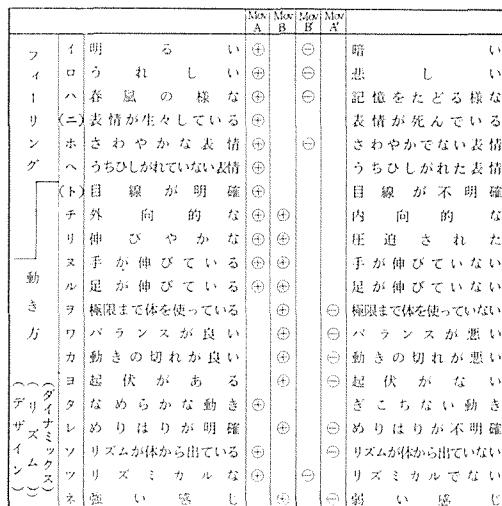


Table.4 言語による反応 $P < 0.05$
(3尺度による有意差) ※有意差⊕⊖

			Max A	Max B	Max C	Max D			
フィ イー リン グ	イ	明 る い	(+9)	(-8)			暗	し	い
	ロ	う れ し い	(+8)	(-6)			悲	し	い
	ハ	春 風 の 様 な	(+8)	(-7)			記 憶 を た ど る 様 な		
	(ニ)	表情が生々している	(+8)	+52	-56		表情が死んでいる		
	ホ	さわやかな表情	(+8)	(-6)	-51		さわやかでない表情		
	ヘ	うちひしがれていない表情	(+8)				うちひしがれた表情		
	(ト)	目線が明確	(+6)	+50	-54		目線が不明確		
	チ	外向的な	(+7)	(-6)	-58		内向的な		
	リ	伸びやかな	(+8)	(+7)	-51		圧迫された		
	ス	手が伸びている	(+8)	(+8)	+54		手が伸びていない		
動き 方	ル	足が伸びている	(+8)	(+7)			足が伸びていない		
	ヲ	極限まで体を使っている	(+6)	(-7)	-78		極限まで体を使っていない		
	ワ	バランスが良い	+58	(+4)	(-6)		バランスが悪い		
	カ	動きの切れが良い	(+8)	(+8)	(-6)		動きの切れが悪い		
	コ	起伏がある	(+7)	(-6)	(-6)		起伏がない		
	タ	なめらかな動き	(+7)		-59		ぎこちない動き		
	レ	めりはりが明確	(+8)	(-6)	(-6)		めりはりが不明確		
	ソ	リズムが体から出ている	(+6)	+59	(-6)		リズムが体から出していない		
	ツ	リズムミカルな	(+7)	+54	(-6)		リズムミカルでない		
	ネ	強い感じ	50	(-7)	(-6)		弱い感じ		

Fig.4 言語による反応 $P < 0.05$
(3尺度による有意差) ※有意差⊕⊖



⊕左 ⊖右